

月例研究会 (2019年10月18日)

ギャラリートーク (展示解説)

榎 一江

2019年10月1日から20日にかけて、法政大学市ヶ谷キャンパス14階博物館展示室において「HOSEI ミュージアムプレ企画／大原社会問題研究所創立100周年・法政大学合併70周年記念特別展示『社会問題研究のフロントランナー——研究所の創立から合併まで』」を開催した。10月の月例研究会はギャラリートークと称し、この特別展示会場において、展示を担当した各研究員がその意図や見どころを紹介する企画を実施した。

榎一江研究員は、「100周年記念展示および特別展示について」解説を行った。そもそも、多摩キャンパスの大原社会問題研究所入口に展示スペースを開設して、100周年記念展示を始めたのは2018年5月のことであった。ここでは1919年に大阪で設立された研究所が1949年に法政大学と合併するまでの活動に焦点を当て、「初代所長高野岩三郎と高野房太郎」「米騒動100年」「ポスター」「堺家・近藤家関係資料」「貴重書庫」「月島調査」「水平社」「大阪から東京へ」という8つのテーマ展示が企画された。市ヶ谷での今回の展示が、多摩で開催中の100周年記念展示の特別展示として企画された経緯やこれが2020年にオープン予定のHOSEIミュージアムプレ企画であることが説明された。

立本紘之研究員は、「堺家・近藤家関係資料について」解説を行った。2013年に研究所に寄贈された本資料群の受け入れから整理を一貫して担当した研究員ならではの視点で、展示資料

の見どころが説明された。

伊東林蔵研究員は「稀観書について」解説を行った。研究所の貴重書庫には、宗教改革、市民改革、社会主義運動など世界規模の変革や運動をもたらす原動力になった稀観書が多い。貴重書庫の再整理を担当する研究員として、展示資料の選定や見せ方の工夫について説明した。

伊東久智研究員は、「月島調査・水平社について」解説を行った。月島調査は日本における社会調査の草分けとして知られるが、その意義を自身の研究との関係にも触れつつ説明した。なお、水平社に関しては多摩キャンパスで展示中のため、1点だけの展示となった。

ギャラリートークは、実際に展示を見るだけではわからない資料選定の意図や資料の背景を知ることができる魅力的な試みである。筆者が担当する世田谷市民大学のゼミ生も参加して好評であったが、もう少し多くの方に参加してもらえるよう宣伝に力を入れると、さらにより企画になったと思う。

なお、10月19日(土)、20日(日)は社会政策学会第139回大会を法政大学市ヶ谷キャンパスで開催した。大原社会問題研究所とかかわりの深い社会政策学会の会員にもこの特別展示を見ていただけるよう準備し、多くの来場者を得たことを付記しておく。

今回の特別展示にあたっては、展示を担当した上記研究員の外、新原淳弘研究員が展示実務の中心を担った。また、開室時の展示室担当には五十嵐千尋研究員も加わり、資料担当研究員が交代で展示室勤務を行った。21日の撤収作業には職員の中村美香さんにも加わっていただいた。関係者の皆様に感謝するとともに、無事、特別展示を終えられたことに今は安堵している。(えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授)